

安江巳代治氏採集による加茂郡白川町切井小丸山遺跡資料
Introduction of Materials Collected by Yasue Miyoji from the Komaruyama Site, Kirii,
Shirakawa Town, Kamo-district

長屋幸二¹
*Koji Nagaya*¹

¹岐阜県博物館

要 旨

平成 25 年 10 月に安江久吉氏より寄贈を受けた加茂郡白川町の小丸山遺跡採集資料について紹介する。白川町誌では白川町最古の遺跡とされており、縄文時代草創期の石器が確認された。縄文時代中期等の石器石材は、下呂石だけでなくチャート岩や黒曜岩の利用が目立ち、山を介して八百津町や恵那・中津川方面との結びつきがうかがわれた。弥生時代中期の土器などもみられ、山間における弥生時代遺跡の好例である。

はじめに

当館が収蔵する考古資料は、個人による地表面採集品などが主であり、その多くは未報告である。こうした館蔵資料を研究活動の俎上に載せるため、順次観察、図化し、資料紹介を行っている。今回は、今年度寄贈を受けた加茂郡白川町切井丑丸の集落に所在する小丸山 A 地点遺跡、小丸山 B 地点遺跡の資料について紹介する。

1. 資料採集地について

今回紹介するのは、昭和のはじめ頃を中心に加茂郡白川町切井丑丸の安江巳代治氏によって採集された資料である。

採集地は飛騨川水系の白川支流赤川の左岸であるが、ここより 2km ほど遡れば恵那市中野方へ抜ける峠に至る赤川の最上流域である。赤川上流は谷が深く谷底平野はそれほど発達しないことから、現在も集落は山腹の緩斜面に広がる。遺跡の所在する丑丸の集落は川の南、すなわち山塊中腹の北側緩斜面に広がるが、採集地は小丸山と称される小さな丘陵（標高 499m）とその南の山塊に挟まれた一帯である。岐阜県遺跡地図では、小丸山 A 地点遺跡(岐阜県遺跡番号 G29S01393：白川町切井丸山：縄文時代)、小丸山 B 地点遺跡（同 G29S01394：白川町切井丑討ヶ根：縄文時代）の 2 遺跡として登録されている。

採集者はすでに故人であるが、その弟である山口政七氏、安江久吉氏等に採集状況についてお話を伺い、現地

を案内していただくことができた（平成 25 年(2013)10 月 27 日）。

小丸山 A 地点遺跡は、小丸山と山塊がなす鞍部から南の山林に入る丑丸林道（住宅地図 363・5・6）が開削された際に発見された。昭和 7 年（1932）のことである。

その出土状況（切通しのカット面）の立面図が、『白川町誌』に図示されている（白川町誌編纂委員会、1968）。それによると、30cm ほどの厚さの表土の下に深さ 120cm、幅 200cm ほどの、底面が平坦で立ち上がり明瞭な竪穴があり、底面の中央付近に焼土、隅近くには弥生時代か古墳時代の甕か壺と思われる完形の土器が描かれている。今回うかがった話によると、その周囲から多量の土器や石器が出土したという。寄贈資料には完形土器は含まれないが、この土器はいったん採集されたものの、巳代治氏によって再び埋め戻されたそうである。

図示された遺構は、地床炉を有する竪穴建物跡であろう。この数値に従えば、胸辺りの高さまで掘り込んだ深めの竪穴建物である。ただし、巳代治氏が残した別のメモには、地表面から 1m ほどの深さで土器や石器が見つかったとあり、町誌に示された深さの数値については概数としてとらえるべきであろう。

この遺構が確認されたのは林道東側のカット面であるが、現在は石垣で保護されており、観察することはできない。林道西側のカット面は現在も赤土の地山が露出しているが、遺構も遺物も観察することはできなかった。遺物の分布はそれほど広範囲には広がらず、遺構の周辺に集中するスポット的なものであったという。

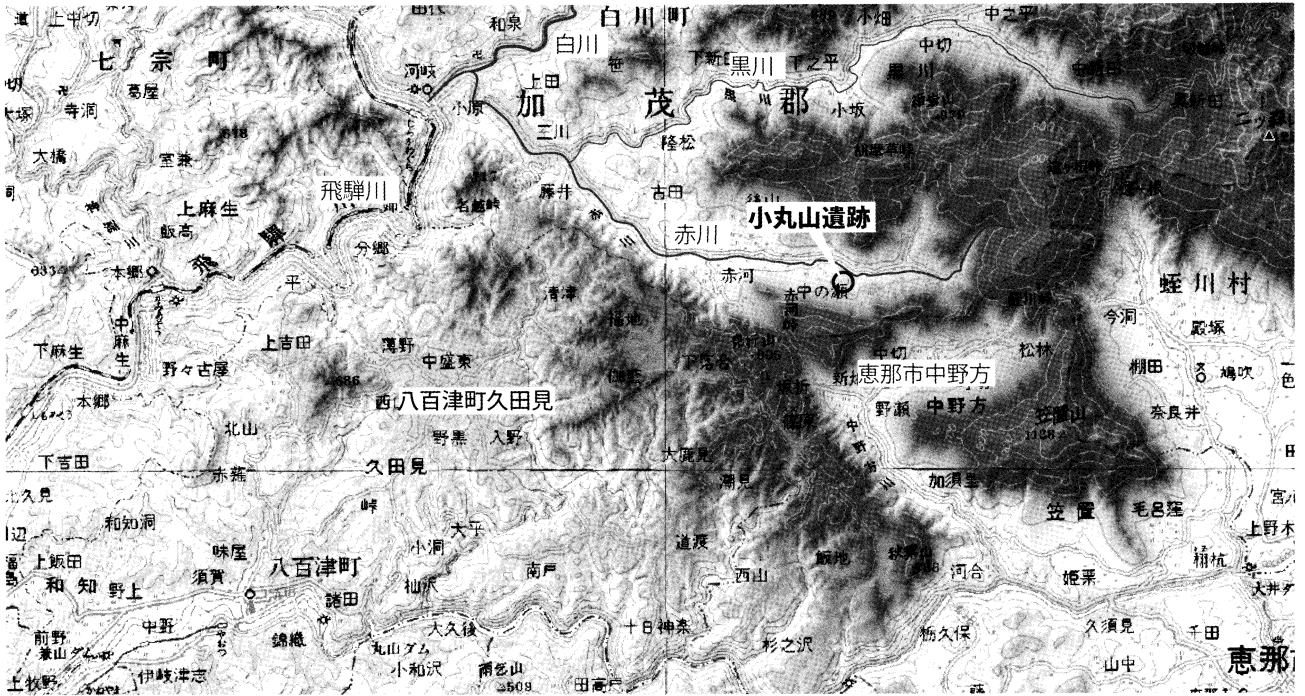


図 1. 小丸山遺跡位置図

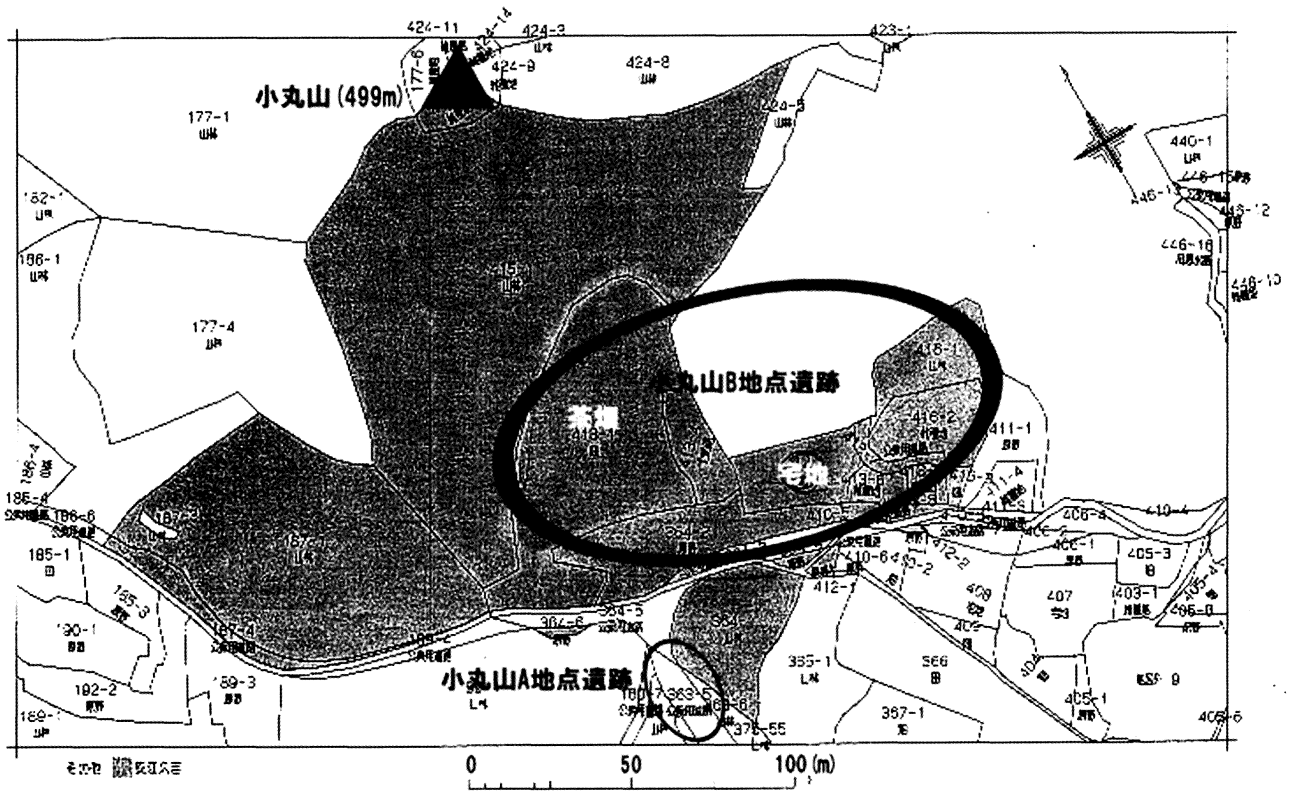


図 2. 資料採集地点

小丸山 B 地点遺跡は、住宅地周辺 (413・5・6・7, 416・2・3 ほか) から茶畑 (413-1) 辺りの広い範囲である。住宅地周辺ではスクレイパーや石鏃など、茶畑では石鏃の類が採集されたという。

茶畑の脇には井戸の跡がある。水道がひかれるまでは利用していたという。山腹ではあるが、浅いところに地下

水脈があり、水を得やすい地であったようである。

2. 採集資料について

採集された資料は、縄文時代草創期のもの、縄文時代中期から後期にかけてのもの、弥生時代中期のもの、山

茶碗、近世陶器などがある。

採集資料は、一部に出土地の地番が記されているものの、ほとんどは小丸山 A 地点遺跡・小丸山 B 地点遺跡いずれから出土したものであるのか定かではない。したがって、小丸山遺跡として一括して扱い、器種ごとに紹介していきたい。

神子柴型石斧（図 3-1）

1 は暗灰色泥岩製の神子柴型石斧破片。軟質の石材で、裏面は広い範囲に、表面は刃縁部に研磨が施されている。両側縁に粗めの剥離を施して断面三角形に成形し、神子柴型石斧の特徴をそなえている。裏面の大きな剥離痕は研磨を切っており成形後のものであることが読み取れるが、風化が進行しており現代の欠損ではない。表面に 2 筋のガジリ痕がある。基部側は節理面で欠損する。

現存する長さ 65mm、幅 41mm、厚さ 25mm。

有舌尖頭器（図 3-2）

2 は青灰色チャート岩製の有舌尖頭器。身部はやや外湾する二等辺三角形で幅広の形状を呈し、逆刺が発達する。表裏両面に素材面を大きく残しており、調整によりサイズを減じないよう留意したのであろうか。裏面に素材の主要剥離面が残る。バルブを除去するために打点付近は厚めの調整を施すが、ほかは浅めの調整である。背面も一枚の大きな剥離面であり、扁平な剥片を素材としている。

長さ 32mm、現存する最大幅 16mm、厚さ 5mm。

石鏃（図 3-3・4・5）

石鏃は 17 点ほどみられる。4 点が有茎鏃で、13 点が無茎鏃である。石材の内訳は、有茎鏃が下呂石 3 点とチャート岩 1 点で、無茎鏃が下呂石 6 点、チャート岩 5 点、黒曜岩 2 点である。

小丸山遺跡より赤川を 6km ほど下った低位段丘に所在する薬師遺跡では、昭和 57 年（1982）に発掘調査が行われ、縄文時代後期を中心とする資料が得られている。報告書では 86 点の石鏃について石材が報告されているが、69 点（80.2%）が下呂石、15 点（17.4%）がチャート岩、頁岩と水晶が各 1 点（1.2%）ずつとなっている。（有茎の石鏃は 3 点で、2 点が下呂石、1 点がチャート岩。）当館に寄託されている、ほかの白川町内の資料を見ても、東白川村の発掘事例を見ても、やはり下呂石が卓越する傾向が顕著である。しかるに、小丸山遺跡の石鏃に関しては、下呂石とチャート岩が拮抗し、それに黒曜岩が加わるという異質な状況がみられる。小丸山遺跡から 10km ほど西の八百津町久田見などでは、チャート

岩を主体とする遺跡が知られ、恵那市の遺跡では黒曜岩俵いに往来することができ、恵那市へも中野方の峠を越えればすぐである。山を介した石材の移動が想定される。

3 は白色のチャート岩製の石鏃である。細かく緻密な調整に覆われるが、裏面中央に素材のポジティブ面がわずかに残る。正三角形に近い脚部が開く形状であるが、先端部は両側縁とも内湾させるように調整し、尖部を突出させて刺突能力を高めている。基部は表面に最終調整の打点が残る、両側縁は裏面に打点が残る。表裏とも右側は先端部から基部方向に、左側は基部から先端部方向に調整が進む傾向があり、製作者の遠近に支配された動作連鎖が読み取れる（長屋、2004）。「小丸山遺跡 415 ハタ」との注記がある。415 は小丸山山林の地番であり、茶畑周辺での採集資料であろう。

長さ 14mm、幅 15mm、厚さ 3mm。

4 は黒曜岩製。やや粗く大きめの剥離で成形している。表裏とも素材面は残らず、調整剥離に覆われる。最終調整の打点はすべて表面に残り、両側縁とも先端部から基部の方向に調整が進行する傾向がある。対象物の先端と基部を意識した動作連鎖が表れている。有脚鏃であったが、脚部は左右とも折損している。当資料にも「小丸山遺跡 415 ハタ」の注記がある。透明度の高い黒曜岩で、肉眼観察では長野県和田峠周辺の黒曜岩に類似する。

長さ 20mm、幅 13mm、厚さ 4mm。

5 はやや風化が進んだ下呂石製の有茎鏃。逆刺は発達しない。表裏に素材の剥離面が残る、剥片を横位に用いたことがわかる。バルブを薄くするのに苦心しており、厚めの調整剥離を施したため、打点の部位のみ側縁が表裏に波打っている。背面は主要剥離面とは直交する 1 枚の剥離面である。最終調整は左側縁は表面、右側縁は裏面に残る。剥離の進む方向はランダムである。

長さ 43mm、幅 17mm、厚さ 6mm。

石錐（図 3-6）

石錐は下呂石製が 1 点、チャート岩製が 1 点、計 2 点みられる。

6 は下呂石製の石錐。厚手の剥片を用い、深く大きめの調整で、断面三角形の棒状に成形している。表面の中央に素材の剥離面がわずかに残る。先端部の稜部に磨減がみられる。

長さ 32mm、幅 13mm、厚さ 10mm。

つまみ付きスクレイパー（図 3-7）

下呂石製、濃飛流紋岩製、チャート岩製が各 1 点ずつ、計 3 点見つかった。

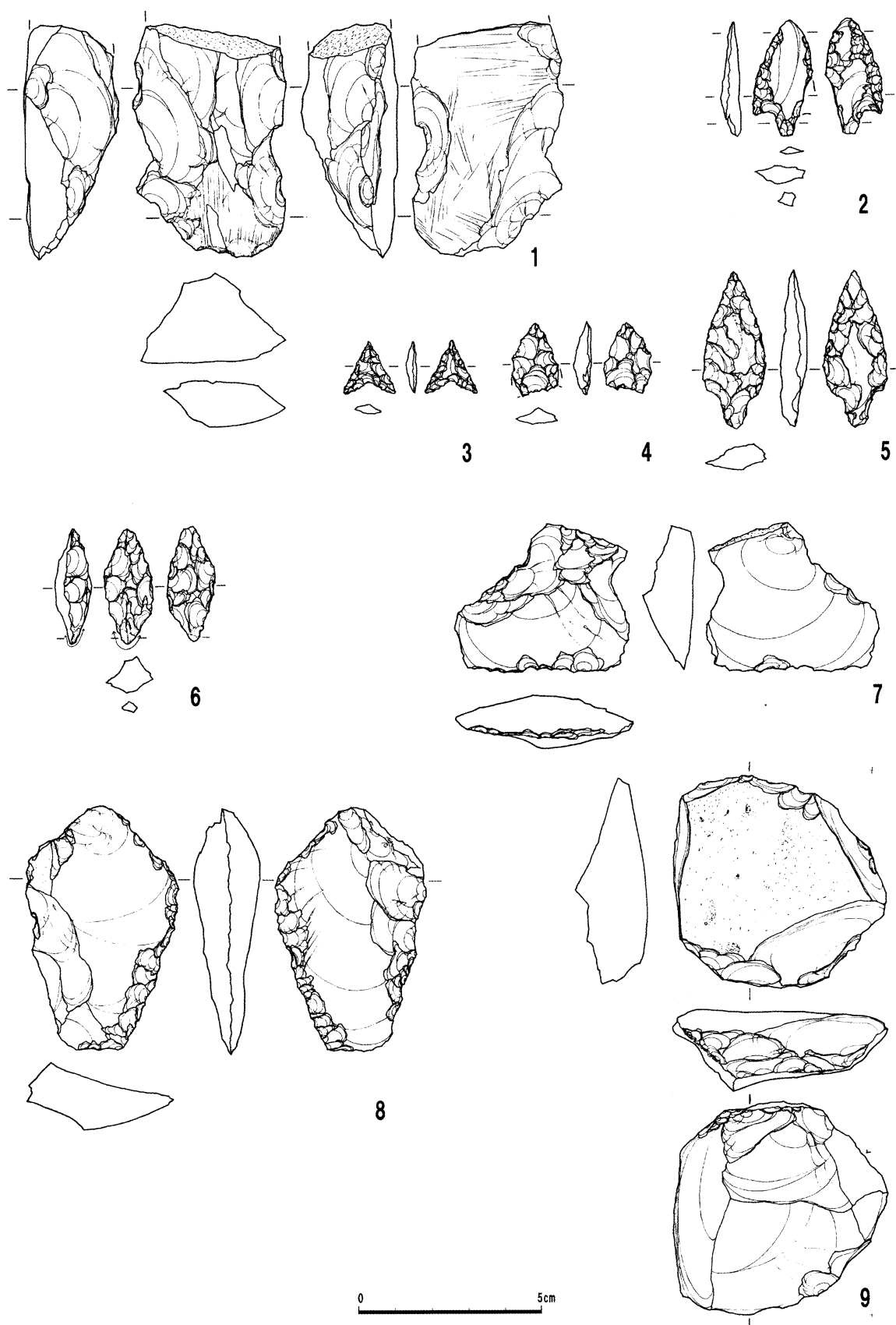


図 3. 採集資料

7 は白色の濃飛流紋岩製である。石英の結晶が見られるが、緻密な石材である。背面下部も平坦なポジティブ面である。厚手の素材剥片の上半に、厚くステップ気味の調整を施してえぐりを作り出している。刃縁の調整はほとんど施さず、素材のエッジをそのまま刃部とする。刃部に見える剥離痕は急角度のもの、緩角度のものなどまちまちで、使用による刃こぼれだと思われる。

高さ 40mm, 幅 46mm, 厚さ 14mm.

スクレイパー (図 3-8)

刃部加工の部位や度合いなど多様なスクレイパーがみられる。

8 は風化が浅く、飴色の光沢が残る下呂石製のスクレイパーである。打面や表面上部などに角礫の礫面がみられることから、河川採取の転礫ではなく、下呂市湯ヶ峰の露頭で採取されたことがわかる。大きめの剥片を斜位に用い、端部側の表裏に調整を施して刃部を形成している。裏面右側にも厚手の調整がみられるが、エッジの側縁観が表裏に波打つことから刃縁の作出ではないと思われる。表面に走る素材背面の稜に対応しており、断面形を表裏対称とするための加工であろう。

白川町誌では、無土器時代(旧石器時代)の石器として当資料の写真が挙げられている。黒土層より 20cm ほど下位の赤土層から出土したことなどがその根拠となっているようである。しかし、縄文時代早期の資料が赤土から出土する例もあり、積極的に旧石器時代に位置付けられる形態的な特徴もみあたらない。下呂石製の全縁加工のスクレイパーはむしろ縄文時代に類例が多く(例えば下呂市上ヶ平遺跡 2 第 89 図 464 など)(八賀, 2002), 縄文時代の所産である可能性もあろう。

長さ 67mm, 幅 41mm, 厚さ 15mm.

石核(もしくは楔形石器) (図 3-9)

9 は、乳白色に風化するが、新欠部は青灰色を呈する石材を用いた石核とした。関市洞戸の阿部山や愛知県三河地域で産する溶結凝灰岩に類似する石材であるが、阿部山の溶結凝灰岩は遺跡での使用頻度がきわめて低いこと、当遺跡では南からの石材流入が盛んであることを考え合わせると、三河地域から運ばれた石材である可能性が高い。片面に大きく礫面を残し、もう一面は平坦な分割面である。図の左部は折断による石核成形であろうか。礫面側に打面調整を密に行い切子状の打面を形成し、分割面を作業面として垂直に近い角度で剥離を行っている。作出された剥片は厚手で、末端はヒンジを起こして

いる。

打点とは反対側にもまばらに小剥離が見られる。硬質の石材であることから、両極打法が用いられたのであろう。楔形石器の可能性もあるが、密な頭部調整の存在から石核としてとらえておきたい。

長さ 59mm, 幅 58mm, 厚さ 20mm.

石製土掘り具・石鎌状石器 (図 4-10・11)

石製土掘り具(打製石斧)とみられるものは、破片も含めて 37 点ほどあり、当遺跡で採集されている石器組成の主体をなしている。(使用石材や形態が石製土掘り具と類似する石鎌状石器と称される資料もいくらか見られる。破片では両者を判別することが難しく、37 点の中には若干の石鎌状石器も混在しているであろう)。これらの石材には、すべてホルンフェルスが用いられている。粘板岩が花崗岩に接して熱変成し硬化した石材で、この近辺では瑞浪市日吉辺りに産地が求められる(長屋, 2005)。小丸山遺跡からは直線距離で 13km ほど南西である。

白川町薬師遺跡でも 480 点ほどの石製土掘り具が出土し、石器組成の主体を占めている。美濃加茂市牧野小山遺跡や可児市宮之脇遺跡、坂祝町東野遺跡等でも多くの石製土掘り具が出土しているが、いずれの遺物でもホルンフェルス(報告書では粘板岩などとされるが、実見したところ硬く変成しているものが多い)が主体を占めるようである。白川町から美濃加茂市・可児市の一帯では石製土掘り具の使用が盛んであり、その素材をホルンフェルスが担っている状況がうかがわれる。

10 は石製土掘り具である。黒雲母の結晶がゴマ粒状にみられる変成の進んだ銀灰色のホルンフェルスを用いている。扁平で幅の狭い小型の短冊形を呈するが、当遺跡の石製土掘り具はほとんどがこの形である。左側縁の基部側は折れ面であるが、磨滅により切られており、折損ではなく成形のための折断であると考えられる。

先端を中心に、両側縁に広く磨滅が見られるが、表裏面の磨滅はそれほど顕著ではない。石製土掘り具を挟み込んだ柄が、先端近くまで覆っていたことが想定される。

山腹で出土する石製土掘り具には、磨滅より潰れが発達することが多い。崖錐などの岩がちなところで使用されたためと考えられる。しかし、当遺跡の石製土掘り具には河岸段丘の資料にみられるような磨滅が発達している。A 地点のカット面で確認されるような赤土堆積地で用いられたのであろう。

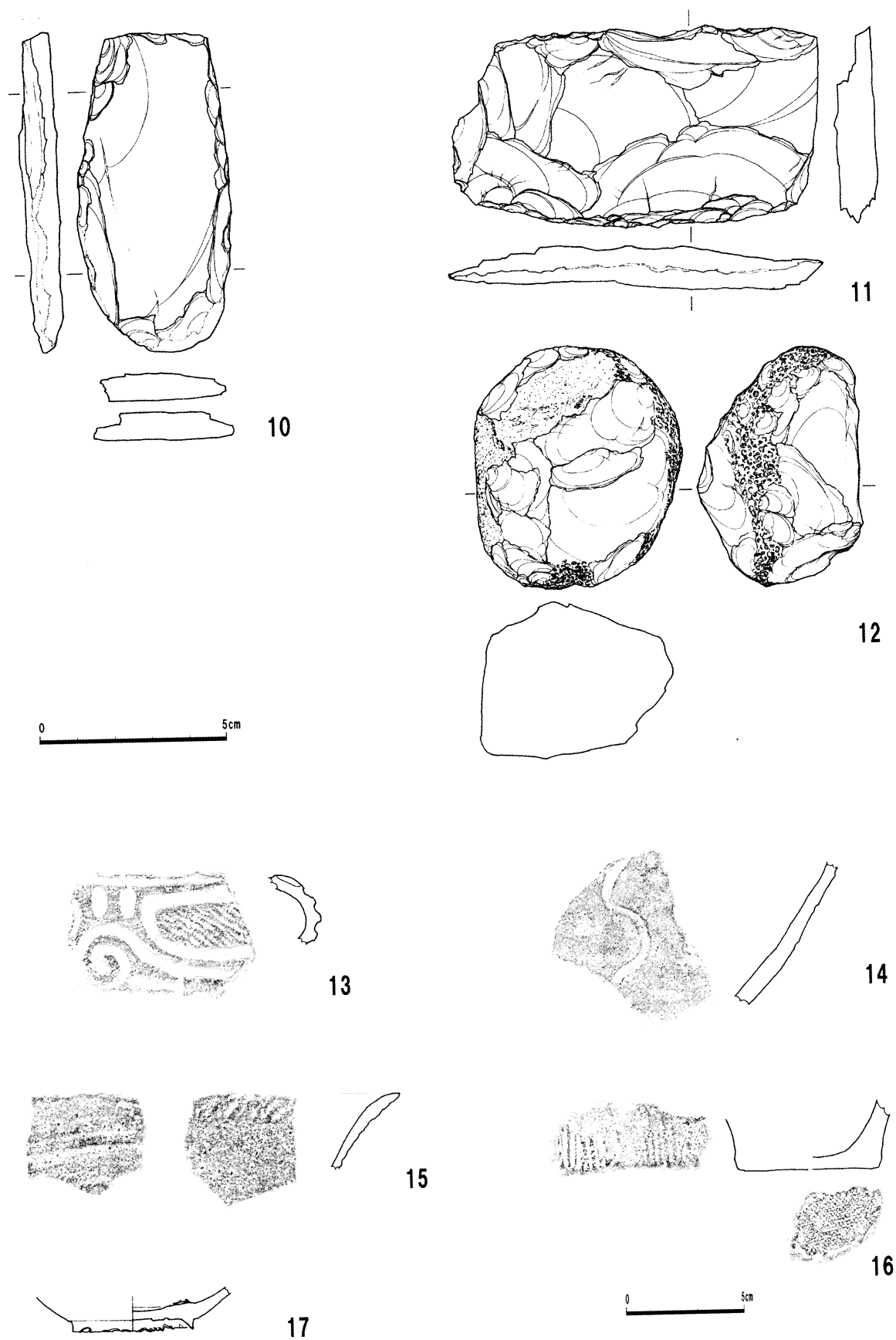


図 4. 採集資料

長さ 86mm, 幅 41mm, 厚さ 8mm.

11 は石鎌状石器とした．扁平なホルンフェルス素材とし、短冊形を呈するなど石製土掘り具と類似するが、刃部は端部ではなく側縁部に形成される．上辺には刃潰し状の調整が急角度に施されるが、下辺には表裏に細かな調整を加えて両刃の刃縁を形成している．広い範囲に弱い磨滅も認められる．右端は折れ、左端は粗い剥離が表面側のみに施され、不整形．

幅 98mm, 高さ 58mm, 厚さ 11mm.

ハンマーストーン (図 4-12)

12 は手に持った際にずっしりくる硬質の濃飛流紋岩を用いたハンマーストーン．角礫もしくは亜角礫を用い、広い面ではなく稜部を中心に敲打痕が密に残る．木の実などを割る叩き石は、軟質の安山岩や砂岩などを用い広い面に敲打痕が残ることから、当資料はそうした調理具ではなく、石器製作などの工具であると考えられる．「小丸山 413」との注記がある．これは、現在茶畑となっている小丸山南斜面の地番である．

長さ 65mm, 幅 56mm, 厚さ 43mm.

縄文土器 (図 4-13・14)

土器片は小片が多く、時期が認定できるものは縄文時代中期後葉のものがほとんどである．13 は頸部で外反し口縁で強く内湾するキャリパー状の土器片．沈線で渦巻文や区画文を描き、区画の中には縄文を充填している．長石粒が多く入る．14 は胴部片．蛇行沈線が縦走する．胎土に長石粒や黒雲母片がわずかに入る．

弥生土器 (図 4-15・16)

やはり小片が多いが、弥生時代中期の貝田町式土器の頃のものがほとんどである．15 は深鍋の口縁部片．外面には横位に条痕文が施され、内面には刺突文が連続する．口縁端部はやや尖り気味である．胎土に長石粒、石英粒がわずかに入る．16 は深鍋の底部片．外面には縦位に条痕が入り、底面には布目圧痕が見られる．長石粒がわずかに入る．

山茶碗 (図 4-17)

中世・近世の陶器も若干みられる．17 は山茶碗の底部片．均質手で胎土は密．径 1mm 以下の長石をわずかに含み、灰白色を呈する．高台径はおよそ 50mm と小型で、厚さは 5mm 程と薄手である．内面底部に指圧痕がみられる．断面三角形の高台が貼り付けられ、高台端部と内面底部には靱殻痕がある．自然釉が乗る．ほかにも、図示しなかったが、近世のすり鉢などもみられる．

3. 資料の評価とまとめ

昭和 30 年代に、名古屋大学の澄田正一教授が当資料の実見に訪れている．その際、何点かのスクレイパー等をプレ縄文文化（旧石器文化）のものと認定している．

『白川町誌』や『薬師遺跡発掘調査報告書』（白川町教育委員会、1983）でも、そのコメントを採用し、小丸山遺跡を町内最古の遺跡として評価している．

澄田教授が実見された当時は、名古屋大学による山県市（旧美山町）谷合の九合洞窟の調査が行われるなど、まさに東海地域の縄文文化黎明期の解明が始まった時期でもあった．小丸山遺跡もそうした遺跡に準ずると評価されたのである．町誌で先土器時代の資料とされたスクレイパーに関しては草創期やそれ以前に位置付ける論拠に乏しく、旧石器時代の遺跡とする確証は得られなかった．しかし、神子柴型石斧や有舌尖頭器などの縄文時代草創期の資料が確認でき、現在のところ白川町内で最も古い貴重な遺跡であるといえる．

縄文時代草創期以降も、この地は断続的に利用されたようである．縄文時代中期には、チャート岩、黒曜岩、下呂石など様々な石材が用いられている．白川町の白川・黒川沿いの河岸段丘に立地する多くの遺跡では下呂石の利用が圧倒的であり、当遺跡の石材組成は異質である．河岸段丘に営まれた多くの遺跡では川筋を単位とした生活圏が形成されていたのに対し、丑丸辺りでは山塊を介した生活圏も存在したのであろう．それが中津川や八百津と共通する石器石材に表れているのだと考えられる．

弥生時代中期の資料も散見される．有茎の石鎌や石鎌状石器などもこの時期のものであろう．また、小丸山 A 地点遺跡で確認された竪穴遺構も、出土状況図に地床炉や壺が描かれていることから、この時期の竪穴建物である可能性が高い．山間部に選地する弥生時代遺跡の貴重な例である．

中世、近世にも活動の痕跡が認められる．かつては、丑丸から西に丈衛門林道が山を越えて八百津の福地に至り、途中には茶屋が営まれるほどの人通りがあったそうである．安江家には天秤棒などが残り、かつての盛んな往来をうかがわせる．

謝 辞

本稿執筆にあたり、山口政七氏、安江久吉氏、岩月麻里氏には、採集地や出土状況、地域の概略などについてご教授いただいた．この報告を持ち感謝の意を表したい．

文 献

岐阜県教育委員会, 1990, 改訂版岐阜県遺跡地図

八賀哲夫, 2002, 第 5 章出土遺物. 上ヶ平遺跡 2, pp.120.

(財) 岐阜県文化財保護センター

河合洋尚, 2007, 第 3 章第 4 節縄文時代. 東野遺跡, (財)

岐阜県教育文化財団文化財保護センター

白川町教育委員会, 1983, 薬師遺跡発掘調査報告書.

白川町誌編纂委員会, 1968, 第 2 編第 1 章原始時代. 白川町誌.

長屋幸二, 2003, 当館の尖頭器資料について～調整作業の詳細な検討～. 岐阜県博物館調査研究報告, 第 24 号

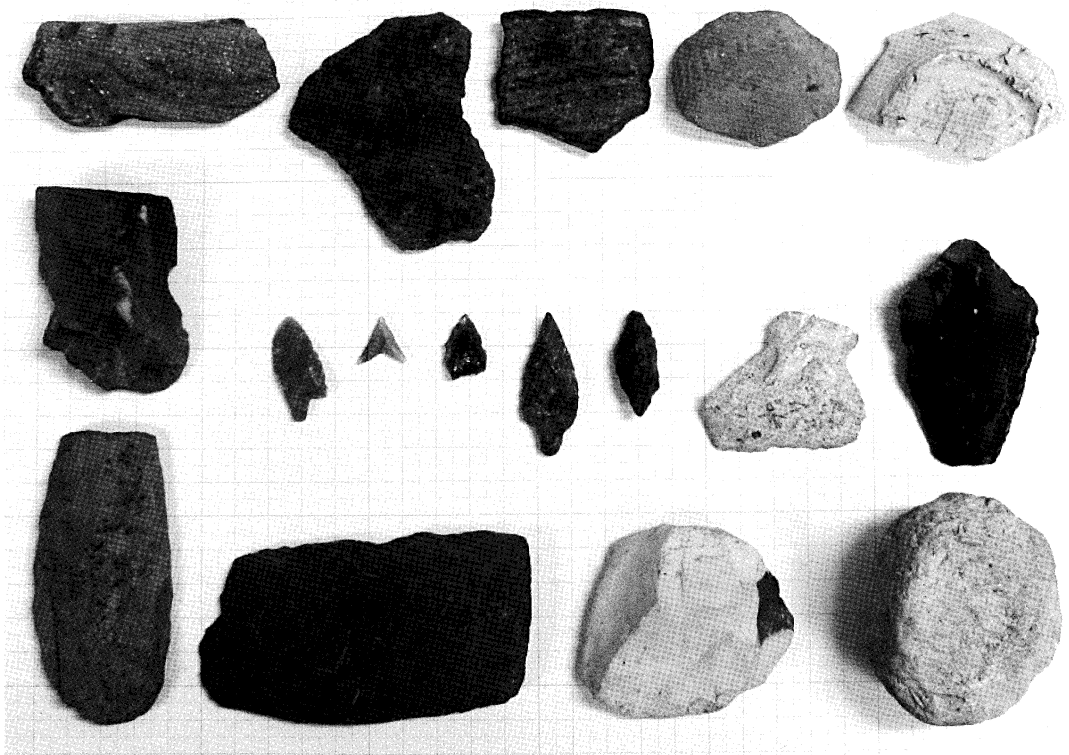
長屋幸二, 2005, 石製土掘り具の製作者. 岐阜県博物館調査研究報告, 第 26 号, pp.5-6



図版 1. 小丸山 A 地点遺跡（北から）正面の山林が小丸山写真奥に向かって下り坂



図版 2. 小丸山 A 地点遺跡（北から）石垣で覆われる左側のカット面の最も高い辺りで竪穴遺構が見つかった.



図版 3. 採集資料

2014 岐阜県博物館

調査研究報告 第35号 正誤表

[誤り]

P 57 右列 1行目から2行目

「岩を主体とする遺跡が知られ、恵那市の遺跡では黒曜岩伝いに往来することができ、恵那市へも中野方の峠を越えればすぐである。…」

↓

[正しい] ※ ゴシックの文章を追加する

P 57 右列 1行目から2行目

「岩を主体とする遺跡が知られ、恵那市の遺跡では黒曜岩の石器利用が知られる。小丸山遺跡から久田見へは尾根伝いに往来することができ、恵那市へも中野方の峠を越えればすぐである。…」